

2009年12月14日に筑波大学(春日地区)の図書館情報メディアユニオンの第一共同研究会議室にて、川崎良孝氏(京都大学)を講師にお迎えして、アメリカ公立図書館史学史に関する講演が開催された。

英米の図書館史研究分野においては、世紀の転換期以降、注目すべき動向がみられる。図書館史研究分野の雑誌 *Libraries & the Cultural Records* (2006年に *Libraries & Culture* から改称) と *Library & Information History*(2009年に *Library History* から改称) はこの時期にそれぞれ新しい誌名を採用している。2001年の *Library History* 誌上に掲載された Donald G. Davis, Jr. (当時 *Libraries & Culture* の編集者) と Jon Arvid Aho の共著論文「図書館史研究はどこへ向かうのか?」¹⁾ は、図書館史研究に一石を投じた、イギリス公立図書館史研究の泰斗 Black Alistair の論文²⁾ に応えるかたちで、図書館史研究の将来像について (1) *Library History* の維持、(2) *Information Science*、(3) *History*、(4) *History of the Book* という4つのモデルを示して注目された。こうした展開がみられるなか、図書館の歴史的研究について、これまでを振り返り、新しい研究動向について概観を与えることは時宜を得ている。

本講演は、講師ご自身が多年にわたり研究に従事してこられたアメリカ公立図書館史学史に関するものであった。講師には数多くの著書、論文および翻訳書があることは言を俟たないが³⁾、なかでも本講演に関連する内容については、『図書館の歴史—アメリカ編』(日本図書館協会、1989年、増訂版1995年、増訂2版2003年)⁴⁾ と『アメリカ公立図書館成立思想史』(日本図書館協会、1991年)⁵⁾ を挙げるができる。さらに、論文では「アメリカ公立図書館の解釈をめぐる」(『図書館学の研究』(論集・図書館学研究の歩み 第2集) 日外アソシエーツ、1982所収)、「Sidney Dizion

と図書館史研究」(『図書館学会年報』1984年所収)、「ジェシー・H・シェラの図書館史研究と『パブリック・ライブラリーの成立』」(『図書館界』1989~1990年所収)等の研究をあげることができ⁶⁾、さらに同氏の翻訳書『パブリック・ライブラリーの成立』(日本図書館協会、1988)⁷⁾ や『民主主義と図書館』(日本図書館研究会、1994)⁸⁾ に付与された訳者のあとがきも看過できない。

アメリカ公立図書館史学の変遷は19世紀の Josiah Quincy などを第1世代とするが、本講演では、おもに第2世代以降のアメリカ公立図書館史学史を概観する内容であった。第1世代は過去の客観的な再現に意を注ぐ素朴実証主義である一方、第2世代以降は歴史の解釈を行ってきた。個別に名前を挙げれば、第2世代にあたる J. H. Shera の社会要因理論と S. Ditzion の民主主義理論、第3世代にあたる M. H. Harris の社会統制理論と Dee Garrison の女性化理論、そして第4世代にあたる W. Wiegand、Van Slyck、C. Pawley 等の批判理論にいたる研究の流れが紹介された。

さらに、アメリカ公立図書館史学史における各世代の性格について、それぞれの時代背景や、アメリカの歴史学、教育史学の研究との関係性が指摘された。歴史学では F. J. Turner、V. Parrington、C. Beard に代表される progressive historians (対立を重視する傾向がある)、R. Hofstadter、L. Hartz、D. Boostin、C. Rossiter に代表される consensus historians (社会主義国家が成立した時期に米国の体制を擁護する性格をもつ)、そして Wisconsin school などの new left historians (実践的性格をもつ。現状を否定的に捉え、自由・平等などを実現することを考えている)の存在があり、教育史学では E. P. Cubberley や P. Monroe 等の progressive historians、B. Bailyn、L. A. Cremin、D. Sloan などの culturist、M. Katz、C. Greer、J. H. Spring 等の new-left historians (revisionists)、そして

M. Apple や H. Giroux 等の critical educational studies を挙げるができる。講演ではこのような諸研究の関係を示す俯瞰図が与えられた。

最後に、アメリカ公立図書館史学の最近の研究動向については、多様化の様相をみせていることが指摘され、なかでもジェンダー・階級・移民との関連や、print culture 研究との関連が指摘された。今後もこのような動向について追跡することは大切である。本講演の講師等の尽力により、近年それらの邦訳書が盛んに刊行されつつあることは⁹⁾、日本の読者にとって喜ばしいことである。

(講師のほか敬称略)

注

- 1) Donald G. Davis, Jr., and Jon Arvid Aho. Whither library history?: a critical essay on Black's model for the future of library history, with some additional options. Library history, vol.17, pp. 21-37. (March 2001) なお、同論文に続けて Alistair の返答文 (pp. 37-39) も掲載されている。
- 2) Black Alistair. Information and modernity: the history of information and the eclipse of library history. Library history, vol. 14. pp. 39-45. (May 1998)
- 3) 川崎良孝氏の業績については「京都大学大学院教育学研究科 図書館情報学研究室」(<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/~lib-sci/>) に掲載されたリスト「研究業績」と「最近の業績」を参照することができる (2010_12_28 確認)。
- 4) 川崎良孝著『図書館の歴史 アメリカ編』(図書館員選書 31) 日本図書館協会、1989年；増訂版 1995年；増訂 2版 2003年
- 5) 川崎良孝著『アメリカ公立図書館成立思想史』日本図書館協会、1991年

- 6) 川崎良孝著「アメリカ公立図書館史の解釈をめぐって」(日本図書館学会研究委員会編『図書館学の研究方法』(論集・図書館学研究の歩み 第2集) 日外アソシエーツ、1982年、pp. 118-148 所収)；川崎良孝著「Sidney Ditzion と図書館史研究— “The Anglo-American Library Scene” を中心として」『図書館学会年報』30 巻 4号、pp. 145-158. (1984.12)；川崎良孝著「ジェシー・H・シェラの図書館史研究と『パブリック・ライブラリーの成立』」『図書館界』41 巻 4-5号 (1989. 11 - 1990.1)、その他の最近の論文については、前掲サイト 3) のリストを参照。
- 7) ジェシー・H・シェラ著『パブリック・ライブラリーの成立』川崎良孝訳、日本図書館協会、1988年
- 8) シドニー・ディツィオン著『民主主義と図書館』川崎良孝訳、日本図書館研究会、1994年
- 9) アメリカ公立図書館史学の最近の研究業績は、近年京都図書館情報学研究会によって翻訳が刊行されている。ウェイン・A・ウィーガント著『手に負えない改革者：メルヴィット・デューイの生涯』川崎良孝・村上加代子訳 (2004年)；アビゲイル・A・ヴァンスリック著『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890 - 1920年』川崎良孝・吉田右子・佐藤恭子訳 (2005年)、川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』(2001年)など、京都図書館情報学研究会の出版物は前掲サイト 3) の「京都図書館情報学研究会」を参照 (2010_12_28 確認)。

原 淳 之 (筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科)